

西成彦『耳の悦楽 ラフカディオ・ハーンと女たち』(紀伊國屋書店・2004)は、平川に伴走しながらも、異なった音調を響かせる。西はすでにHearnにはearが隠れているとして、「耳の人」ハーンを解明したが、本書の冒頭にはこうある。「ラフカディオ・ハーン言葉は、多くの人々の声からできあがっている。たいていは、そもそも英語など用いるはずもない人々の声である。しかも、言葉だけではない。人間の生きた身振りや息づかい、ひとりひとりの気配が、英語で書かれたそのテキストの中には封印されている。ハーンは著作をひととくということは、その封印をとくことである」

さらに最近の論文(『国文学』學燈社・2004年10月号)で西は、ハーン「の『耳なし芳一』法一」を読むアントナン・アルトーに注目する。そして筆者が聴覚的な記憶に覆れるといった常識を越えて、視覚を奪われた語り手の脳裏にこそ、晴眼者にしか期待できない極彩色の世界が広がっている可能性を透視する。実際ハーンは左眼を事故で失明し、右目も極度の近眼だったが、色彩の喚起力にも一倍敏感だった。

そうしたハーン「の視覚的感性にとりわけ強く感応したのが、ほかならぬ柳田國男だった。牧野陽子の説得力ある指摘(シンポジウム『世界の中のラフカディオ



日本礼賛の親日家から 世界文学の漂泊者へ

ラフカディオ・ハーン没後百年——最近の著作や論文を部分的に概観する——下

国語日本文化研究センター研究員兼
総合研究大学院大学教授
榎賀繁美

オ・ハーン)に従えば、『知られざる日本の影影』に描かれた盆踊りの高の提灯の描写は、柳田の『遠野物語』の盆踊りの叙述に直に響いている。だが、この「脚色」の事実は、けっしてそのまま柳田の『遠野物語』の価値を無にはすまい。とすれば逆にハーン「の脚色」にばかり目くじらを立てるのとは、いささか公平を欠く判断ということにもなる。

劉岸偉『小泉八雲と近代中国』(岩波書店、2004)が今年の大きな収穫であることは、疑いあるまい。日本では未知の情報が満載され、的確な評価が的確な筆致で加えられる。例えば、ストラスブル大学に博士論文『悲劇心理学』を提出した朱光潛は『東方雜誌』(1926年9月)に「小泉八雲」を發表し、ハーンを「東方の人情美を理解できた最初の西洋人」と評価し、書簡集の魅力を語っている。その朱は書簡体の著作、『青年に与える十二通の手紙』(1929)で、「羅文遠の龍児となった田だが、そこには朱の私淑するブラウニングの詩が写される。ところがその詩の解釈には、ほかならぬハーン「の解釈が当てられている。即ち、明確な言葉とならず、それゆえすくにも忘れ去られた空想のうちこそ、ある人の仕事「の最良の玉片が潜んでいる——と。さらにハーンが重視した「小品文」は、日本では盛行を見せたとは言い難かったが、むしろ1920年

代以降の中国——周作人の周辺——で、厨川白村などをも媒介として開花したのではないかと、著者は指摘する。加えて、生醫りのマルクス主義に傾斜してゆく「創造社」の苦手作家たちが、周の兄である魯迅の「閑暇」を性急に非難した際に、魯迅は逆に「閑暇」の大切さを説いて見せた。そしてこの「閑暇」の徳は、魯迅がハーンから引き出した価値観だったことも、本書はさりげなく指摘する。

日中戦争期、時局柄「親日家」と見なされたはずのハーン「の遺作『日本——ひとつの解明』(邦訳名は『神國日本』)の中国語訳が、潜伏中の中国共産党員を中心として編集された『雜誌』(1942復刊)、足掛け4年がかりで掲載された事実なども、意味深長といえる。そこには、誰を好漢、誰を愛国者などとは単純に色分けできない、当時の中国での複雑な文壇事情が垣間見られるからだ。ちなみに曹湜による翻訳の種本だった戸川秋吉訳の『神國日本』(1938)からは、古来の美德が急速に失われてゆく日本の将来を危ぶむ、ハーン晩年の警句の部分は、(時局への配慮からか)ことごとく削除されていた。このように劉岸偉の著書は、小泉八雲がいかに読まれたかの実証的解明の大切さを教えてくれた。没後百年を迎えて、ハーン「研究は、新しい地平を拓きつつ、改めて読者に迫ってくるようだ。